

絵本の教えることばのジェンダー規範

佐竹 久仁子

要 旨

絵本というメディアでは、主人公に男が多いことや男女の描かれかたに違いがあることなど、ジェンダーバイアスが存在することが先行研究により指摘されている。本稿では、これに加えて、登場キャラクターのことばづかひの性差も大きいことを、自称代名詞と文末形式の調査から明らかにした。それは、日本語概説書などでとりあげられる「ことばの男女差」どおりのものである。絵本のジェンダーバイアスはことばにも存在し、絵本はこどもに日本語の〈女ことば／男ことば〉規範を教えるメディアとなっているといえる。

キーワード：絵本、ことばの性差、〈女ことば／男ことば〉規範、自称代名詞、文末形式

1. はじめに

絵本はほんの1、2歳のころから、家庭だけではなく、幼稚園や保育園でも繰り返し「読み聞かせ」がおこなわれており、アニメやゲームと並んで、こどもの言語規範意識の形成に大きな影響を与えるものだといえる。これまでの絵本とジェンダーに関する研究では、女（の子）と男（の子）の登場数や描かれかたに差があることが指摘されている。では、ことばについてはどうだろうか。本稿では、人気のある絵本をとりあげて登場キャラクターのことばの性差を調査し、女（の子）と男（の子）はどのようなことばづかひをするものとして描かれているのかをみていく。

2. 調査対象とした絵本

出版されている絵本の数は膨大である。数多くの絵本の中から、よく読まれていると思われる絵本を選ぶために、本稿では、絵本の紹介サイトとして人気の高い「絵本ナビ」と全国学校図書館協議会選定の「よい絵本」リスト

を参考にした。調査対象とした絵本は以下の①②である。

①「絵本ナビ」で年齢別に「編集部おすすめ」としてあげられている作品のうち、2歳から6歳向けのもの⁽¹⁾

②全国学校図書館協議会選定第28回「よい絵本」リスト(2016)⁽²⁾で幼児(3歳～就学前)向けとしてあげられているもの

①は196作品、②は88作品で、23作品が①②に共通するので、調査対象の絵本は261作品(内、海外の絵本の翻訳は59作品)である。絵本は、古い作品でも名作として定評があって読み継がれているものも多い。261作品のうち、出版年のもっとも古いものは1959年(2作品)、新しいものは2017年(1作品)である。調査した絵本のリストは本稿末尾に示した。

3. 絵本における女(の子)と男(の子)

絵本のことばについてみる前に、調査対象とした絵本では女(の子)と男(の子)がどのように描かれているのかを概観しておこう。

ジェンダーの視点から絵本というメディアを分析した論考には、藤枝(1983)をはじめとして、坂西・大澤(1989)、藤田(2003)、西川(2017)などがある。いずれも多数の絵本を調査・分析したものであるが、共通して指摘されているのは、絵本に登場するキャラクターや主人公が男にかたよっているということである⁽³⁾。また、主人公の女の子と男の子をはじめ、女と男の描かれかたには強いジェンダーバイアスがあることも指摘されている。今回調査した絵本についても、これら先行研究の指摘があてはまる。

調査した261作品中、男女いずれかが主人公であるものは167作品あるが、そのうち132作品の主人公が男、女が主人公のものは35作品で、女の主人公は男の約4分の1にすぎない。また、擬人化された動植物や無生物も数多く登場するが、主人公に限らず、男として描かれているものが圧倒的多数である。絵からは性別が判断できない擬人化されたキャラクターも、～くん、ボク、オレという呼称によって男であることが示される。

絵本に接するのは女の子も男の子も数はかわらないはずだが、藤田(2003: 262-263)が「女性の不可視性」と呼ぶとおり、絵本に登場するキャラクター

や主人公の男女比の違いの大きさは、無視できない問題をはらんでいる。定番とされている人気の高い絵本の世界では、女の子は片隅に追いやられており、おとな社会の議会や会社の役員会さながらである。こうした絵本の世界は、この社会は男が中心であることを自然なものとして受け止める心的傾向をこどもたちに持たせることになるだろう。

主人公の女の子と男の子の描かれかたの違いも大きい。主人公の男の子たちは、異次元の世界でさまざまに活躍する。冒険し（『かいじゅうたちのいるところ』『おしおのぼうけん』）、戦い（『すっぽんぼんのすけ』）、活発に行動し（『もりのなか』『100かいだてのいえ』）、犬と入れ替わったりする（『ジローとぼく』）。弱さに打ち勝つ姿（『ラチとらいおん』）やユーモラスな姿（『もっちゃうもっちゃうもうもっちゃう』）、わがままとやさしさ（『ぞらまめくんのベッド』）、ユニークな考えかた（『フレデリック』『あな』）、賢さ（『スイミー 小さなこいさかなのはなし』）も描かれる。

一方、女の子の主人公は、数の少なさもあってか、強くやさしいやまんばの娘まゆ（『まゆとおに』）、弱虫だったのが勇気をもって行動するようになる保育園児さくら（『ダンプえんちょうやっつけた』）を例外として、他はいずれも力強さとは縁がない。非現実の世界が舞台とされるばあいも男の子のような冒険の世界ではなく、やさしくおだやかなメルヘンの世界である（『チリとチリリ』『もりのおくのおちゃかいへ』『わたしとあそんで』）。また、多様な世界での行動というより、おつかい（『はじめのおつかい』）や手伝い（『おでかけのまえに』）、料理（『おぼけのてんぷら』）、裁縫（『わたしのワンピース』）など家庭でのできごとが描かれているものが多い。男の子を主人公とする作品にはない、頼りなさ（『おかあさんおかあさんおかあさん…』）やけなげさ（『ちょっとだけ』）、容姿（『でこちゃん』『まあちゃんのながいかみ』）といったテーマがあるのも女の子を主人公とした作品の特徴である。

藤枝（1983：154）は、主人公の男の子と女の子の描かれかたについて「男の子は個性も多様なら、行動の種類も多様で、社会性をもち、空間的にもひろがりをもつにくらべると、女の子のほうは、総じて静的で、ムード的表

現の手段、行為者としてよりも傍観者、見物人、男の子の行為の受け手に使われることが多く、家事の手伝い（おつかい、子守り、料理）、ひとり遊び、あるいは脇役に助けられ保護されて行動するといったストーリーが驚くほどに多い」と述べるが、今回調査対象とした絵本の傾向も、近年の作品があるにもかかわらず、藤枝の指摘どおりである。

主人公には女の子が少ないが、親としては母親が主に登場する。発話のないものも含めれば、親のうち母親だけが登場する作品は46作品あるが、父親だけのものは7作品しかない。両親が登場するのは38作品である。絵本では父親の存在感は薄い。一方、母親はやさしく包容力のある姿が描かれ（『いいこってどんなこ？』）、こどもたちが帰っていくのは母親の待つ家である（『めっきらもっきらどおんどん』）。母親と父親の描かれかたも異なる。母親の絵は64作品にあるが、そのうち27作品の母親はエプロンをつけている。また、母親は家で家事や料理をする姿が描かれるのに対し、父親は外から帰ってくる姿、テーブルについている姿が描かれる。

調査対象とした絵本では女（の子）と男（の子）の性格やふるまい、活動する世界がずいぶん異なるものとして描かれている。旧来のジェンダーのステレオタイプが幅をきかせているのである。絵本はこどもたちにそのステレオタイプを教えるメディアという側面をもっているといえる。

4. 絵本のことばの性差

絵本では女（の子）と男（の子）の描かれかたが異なることを上でみた。では、女（の子）と男（の子）はどのように話すものとして描かれているのだろうか。ここでは、絵本に登場するキャラクターの発することばからそれを探ってみる。調査項目として、日本語概説書などで性差が指摘される自称代名詞と文末形式をとりあげる。

4.1 分析データについて

現代の日本語話しことばの性差規範に注目するために、関西弁や「いなかことば」が用いられている作品（6作品）と昔話（11作品）は分析対象から

除いた。データとした261作品から、これら17作品と絵だけでことばのないものや登場キャラクターの発することばのないもの54作品を除く、190作品を分析対象とする。この190作品から、登場キャラクターの発話とみなせることばを文単位でとりだした。抽出した文の総数は6387文である。女の発話は118作品、男の発話は160作品にあらわれる。キャラクターの性別については、「おんなのこ」「おとうと」のように本文で直接明示されているものもあるが、そうでない場合は、絵（服装や髪型など）やなまえ（マリー、ヒロシなど）で判断し、また、自称代名詞「アタシ・アタイ」の使用者は女、自称代名詞「ボク・オレ」の使用者や「～くん」と呼ばれる者は男とした⁽⁴⁾。

性別の発話文数と発話者数を表1に示す。「その他」は、性別が判断できないキャラクターによる発話（804文）や、男女の発話者のいずれのものかが確定できない発話（231文）、男女複数による発話（発話者が「両親」「園児みんな」とされているような発話、52文）である。「その他」の発話は計1087文で、103作品にある。

表1 性別発話文数 ()内は発話キャラクター数

女	男	男女計	その他	総計
1482 (221)	3818 (431)	5300 (652)	1087 (272)	6387 (924)

以下では、自称代名詞と文末形式にみられた性差を概観する。

4.2 自称代名詞

自称代名詞を使用しているキャラクター数（以下、Cとする）は、女65C（52作品）、男231C（125作品）、性別不明25C（15作品）で、計311C（143作品）である。ここでは、女と男に使われている自称代名詞の形式と延べ使用数を取りあげる。

女の使用形式には、ワタシ、アタシ、ワシ、アタイがみられた。延べ使用数は、ワタシ116〔内、ワタシタチ9〕（42C／37作品）、アタシ63〔内、アタシタチ5〕（22C／16作品）、ワシ7（1C／1作品）、アタイ4（2C／

2作品)である。ワタシ次いでアタシの使用が多い。ワタシの使用キャラクターはアタシのほぼ倍である。いずれもおとなも子どもも使用している。ワシは、『おいしいのぼうけん』に登場する異界のキャラクターねずみばあさん、アタイは、牛(『うんちしたのはだれよ!』)と妖怪の女の子(『めっきらもっきらどおんどん』)の使用で、これらは子どもたちの日常世界の自称代名詞ではないことが示唆される。

男の使用形式には、ボク、オレ、ワタシ、ワシ、オイラ、ワレワレ、オレサマ、ワタクシがみられた。延べ使用数は、ボク531 [内、ボクタチ29、ボクラ13] (159C/107作品)、オレ69 [内、オレタチ7] (37C/25作品)、ワタシ23 [内、ワタシラ1、ワタシドモ2] (13C/9作品)、ワシ17 (11C/11作品)、オイラ16 (7C/5作品)、ワレワレ7 (3C/3作品)、オレサマ3 (3C/3作品)、ワタクシ2 (2C/2作品)である。男ではボクが多い。次いで用いられているのはオレだが、オレの使用キャラクターはボクの4分の1弱である。男の子(人間)だけを見ると、ボクの使用は43C、オレは3Cで圧倒的にボクが多い。絵本は男の子にボク使用をすすめているといえる。ボクとオレの両方が用いられている作品からはオレの位置づけがわかる。たとえば、小さなヤギはボク、化け物と大きな強いヤギはオレ(『三びきのやぎのがらがらどん』)、子豚はボク、オオカミはオレ(『三びきのこぶた』)、こどもの恐竜はボク、それを食べようとする大きな恐竜はオレ(『おまえうまそうだな』)のように、ほとんどの作品でオレは力のある強者の自称に用いられている。ボク・オレ以外の形式では、こどもの使用はない。ワシは老人や博士、王様、オイラは妖怪や動物が使用している。

4.3 文末形式

本節では、助動詞ダ・ダロウ・ヨウ、終助詞カ、一般動詞命令形・禁止ナ、ワ・ゾなどの終助詞を中心に、その出現の様相の性差をみる。なお、以下で示している割合(%)は、特に言及しないかぎり女の発話1488文・221C、男の発話3849文・431Cについてのものである。

(1) 助動詞ダの使用／不使用

助動詞ダは、女の発話では95文（6.4%）、男の発話では639文（16.6%）で用いられており、男の発話に多い。また、女のダ使用は37C（16.7%、36作品）、男のダ使用は219C（50.8%、117作品）で、男のほうがダを使用するキャラクターの割合も多い。ダの性別使用文数の詳細を表2に示す。

表2 助動詞ダの使用文数

	ダ	ダイ	ダヨ	ダネ	ダヨネ	ダナ	ダゾ	ダゼ	ダモン	ダワ	計 (%)
女	32	1	22	2	0	2	5	0	23	8	95 (6.4)
男	385	20	125	34	5	31	21	2	16	0	639 (16.6)

注：ダモンにはダモノの形もある。

ダに終助詞がついた形のうち、ダワは女の発話にのみあらわれる。また、甘えた態度で使われるとされる終助詞モン（モノ）⁽⁵⁾のついたダモン（ダモノ）が、女のダ使用のなかでは2番目に多い。なお、女のダゾ5例はワシで自称する『おしおれのほうけん』のねずみばあさんが使用するものである。

ダの用法にも性差がみられる。ダで言い切る形には、「うん、それはいいかんがえだ」（『ぐりとぐら』）、「ほうえんきょうできみをみつけて、てがみをかいたんだ」（『100かいたてのいえ』）、「いったいぜんたい なにものだ？」（『三びきのやぎのがらがらどん』）、「なんであきらめるんだ？」（『シニガミさん』）のような聞き手に対して主張したり問いかけたりする聞き手目当ての文（例はいずれも男の発話）と、「あら、いやだ」（『そら！はだかんぼ』）、「わー、富士山だ！」（『新幹線のたび』）、「やっぱりおゆがあつすぎたんだ」（『まゆとおに』）のようなひとりご的な聞き手目当ての性的ない文（例はいずれも女の発話）とがある。女の発話では聞き手目当ての性的ない文が多く（32文中25文（78.1%））、男の発話では聞き手目当ての文が多い（385文中290文（75.3%））。

つぎに、ダ不使用文についてみてみよう。ここではダの使用と不使用を比

較するために、ダの省略可能なダ使用の文とダを省略した文（ダ不使用文）の組み合わせとして、つぎの①～④をとりあげる。

- ① ノダ平叙文とそのダを省略した文（ノ・ノヨ・ノネ・ノヨネで終わる文）
〔例〕 わからないんだ（よ・ね・よね）／わからないの（よ・ね・よね）
- ② ノダ疑問詞疑問文とそのダを省略した文（ノで終わる文）
〔例〕 どうしたんだ？／どうしたの？
- ③ 体言＋ダヨ・ダネ・ダヨネ文（形容動詞文も含む）とそのダを省略した文（体言＋ヨ・ネ・ヨネの文）
〔例〕 さんぼだよ／さんぼよ　きれいだね／きれいね
- ④ 疑問詞＋（名詞＋）ダ文とそのダを省略した文
〔例〕 だれだ？／だれ？　なんのことだ？／なんのこと？

次ページ表3は、①～④の文の性別出現数を示したものである。なお、ノダはほとんどがンダの形で用いられている。また、ダはダイのかたちも含む。

ダ使用文とダ不使用文は、女では約1対7であるのに対して、男では約4対1と差があり、女はダを省略した文を多く用い、男は逆にダを省略しない文を多く用いている。使用キャラクター数についてみると、女はダ使用文17C（7.7%、17作品）・ダ不使用文101C（45.7%、69作品）、男はダ使用文143C（33.2%、94作品）・ダ不使用文41C（9.5%、40作品）である。

男のダ不使用文は疑問文（②と④）にかたよっている。また、男のノで終わる平叙文14例の使用キャラクター（9C／9作品）とノネで終わる文4例（1C／1作品）、体言ネの文1例（1C／1作品）の使用キャラクターはすべてこどもである。なお、女の「疑問詞ダ？」2例はダゾの使用者でもあるねずみばあさん（『おしいれのぼうけん』）の使用する「だれだ？」である。

表3 ダ使用文とダ不使用文

	ダ使用		ダ不使用			
		女	男		女	男
①	ノダ	11	142	ノ	73	14
	ノダヨ	8	47	ノヨ	32	0
	ノダネ	0	9	ノネ	13	4
	ノダヨネ	0	3	ノヨネ	1	0
②	ノダ疑問	0	12	ノ?	38	31
③	体言ダヨ	14	78	体言ヨ	61	0
	体言ダネ	2	22	体言ネ	26	1
	体言ダヨネ	0	2	体言ヨネ	2	0
④	疑問詞ダ?	2	38	疑問詞?	8	34
	計 (%)	37(2.5)	353(9.2)	計 (%)	254(17.1)	84(2.2)

(2) 終助詞カの使用・不使用

疑問の終助詞にはカのほかにカイも用いられている。また、疑問文には、「こわいか?」「こわいのか?」に対する「こわい? (「 ϕ ?」と表示)」「こわいの? (「の?」と表示)」のように終助詞カを省略した文もある。ここでは、まず、常体でのカ(カイも含める)使用文数とカを省略したカ不使用文数をみてみよう。

女のカ使用文数は11 [カ6、カイ4、ノカイ1] (6C/5作品)、カ不使用文数は55 [ϕ ?33、の?22]、男のカ使用文数は106 [カ76、カイ21、ノカ6、ノカイ3] (87C/62作品)、カ不使用文数は74 [ϕ ?57、ノ?17] (49C/36作品)である。女ではカ使用文はカ不使用文の5分の1しかないのに対して、男ではカ使用文がカ不使用文より多い。男のカ使用はおとな、こどもを問わず、また、用法も聞き手目当ての問いかけ文(75文)と聞き手目当て性のない文(31文)がおとなにもこどもにも使われている。女ではこどものカ使用は『まゆとおに』のまゆのみで、それも「ああ、そうか」(3例)という納得をあらわす聞き手目当てではない文である。おとなのカ使用文は「もったいないことしてないかい?」(『もったいないばあさん』)のような問いかけ文であるが、話者は老人(3C)とまゆの母親のやまんば、動物のヤギで、使用キャラクターにかたよりがある。

(3) 助動詞ダロウ・ヨウとデショウ・マショウ

助動詞ダロウ（ダロ）が用いられるのは、女では4文（4C／4作品）だけである。1例はウサギの女の子の「おや、なんだろう？」（『おぼけのてんぷら』）という聞き手目当て性のない文で、他の3例は「コップ1ばいでたりるだろ？」（『もったいないばあさん』）のような聞き手目当ての文であるが、この3例はいずれも老人の発話である。女の発話ではダロウよりも丁寧体のデショウ（デショ）のほうが多く、17文（14C／14作品）で用いられており、発話者にはこどももおとなもいる。一方、男ではダロウ38文（30C／28作品）に対してデショウ11文（7C／7作品）と、ダロウのほうが多い。また、ダロウはこどもにもおとなにも使われているが、デショウは丁寧体の会話がかわされる1作品でおとなが使用しているだけで、他の6作品のキャラクターはすべてこどもである。

ヨウ（ウ・ヨウ）とマショウ（マショ）の使用の様相にも性差がみられる。女ではヨウは23文〔内、ヨウヨ1文・ヨウネ8文〕（14C／14作品）、マショウは25文〔内、マショウヨ2文・マショウカ1文〕（21C／21作品）と、ほぼ同数出現し、いずれもこども、おとなを問わず使っている。男のばあいは、ヨウは104文〔内、ヨウカ9文・ヨウヨ9文・ヨウネ7文〕（60C／56作品）用いられているのに対し、マショウはわずか4文（4C／4作品）である。そして、マショウはいずれも敬体で話すおとなのキャラクターの発話にあらわれる。

(4) 一般動詞命令形・禁止ナの使用

女には禁止ナの使用例はなく、一般動詞命令形の使用が9文（5C／5作品）あるだけである。母親の「こら まで。まちなさーい」（『すっぽんぽんのすけ』）やねずみばあさんの「たすけてくれ」（『おいしいれのほうけん』）などおとなの発話に用いられ、こどもの使用はない。女のばあい、行為指示にはおとなもこどもも命令形や禁止ナではなく、「まって」「がんばって」「おっこちないで」「こわがらないで」などのテ形を主に使用しており、その使用文数は51文（39C／35作品）である。また、「～しなさい」が23文（11

C / 9 作品) があるが、これらはおとなから子どもへの行為指示に使われている。

一方、男では、一般動詞命令形は136文 [内、11文は命令形+ヨ] (68C / 43作品)、禁止ナは21文 [内、7文は禁止ナ+ヨ] (16C / 13作品) で、どちらも子どもにもおとなにも用いられている。テ形は89文 (56C / 50作品) があるが、命令形や禁止ナによる直接的な行為指示の文より少ない。なお、「～しなさい」は5文 (4C / 4作品) のみである。

(5) 終助詞ワ・ゾ・ノ・ヨ・ネ・ナ

終助詞には使用数や用法に性差がみられるものが多い。ここでは、ワ・ゾ・ノ・ヨ・ネ・ナについてみてみよう。いずれも常体で使用されているものをとりあげる。

ワの使用は男にはみられない。女では、ダワ8文、ダ以外に下接するワ47文・ワヨ13文・ワネ12文の計80文 (54C / 46作品) がワを使用する文である。なお、他にマスワの形が2例ある。一方、ゾは、『おしおのぼうけん』のねずみばあさんの2文以外はすべて男の使用で、ダゾ21文、ダ以外に下接するゾ99文の計120文 (62C / 51作品) でゾが用いられている。ワもゾも子どもにもおとなにも使われており、ワは女を、ゾは男をマークする終助詞だといえる。

ノの使用は女に多い。女では、ノ133文、ノヨ32文、ノネ13文、ノヨネ1文の計136文 (9.2%、64C / 53作品) がノを使用した文である。男のノ使用はノ62文、ノネ4文の計66文 (1.7%、48C / 38作品) で、女と比べてノの使用割合が少ない。また、女のノ使用は平叙文 (76文) のほうが疑問文 (60文) より多いが、男では平叙文が18文、疑問文が48文で、用法が疑問文にかたよっている ((1) (3) 参照)。

ヨ (ノヨは含めない) は、女136文 (9.2%、65C / 52作品)、男383文 (10.0%、142C / 101作品) に使用されている。女と男の使用割合はあまり変わらないが、男ではダか用言述語に下接するものだけであるのに対して、女のばあい、4割強 (61文) が体言+ダヨの文のダを省略したもので、ダや用言述語に下接するのは75文である。ネの使用はヨより少ないが、用法の性

差はヨと似ている。女のネ使用は61文（4.1%、38C／31作品）ある。そのうち、ヨと同じく4割強の26文が体言＋ダネの文のダを省略したもので、ダや用言述語に下接するのは35文である。一方、男のネ使用は118文（3.1%、72C／60作品）で、1例（こどもの使用）を除きダや用言述語に下接するものである。

ナは、女15文〔内、ダナ2文〕（11C／10作品）、男142文〔内、ダナ31文〕（78C／63作品）で男の使用が多いのだが、用法にも性差がみられる。男のばあい、142文中49文は「さくら、やったなあ」（『ダンプえんちょうやつつけた』）、「おまえ うまそうだな」（『おまえうまそうだな』）のような、ネの意味に近い聞き手目当てのものだが、女のばあい、ねずみばあさんの発話2文を除き、すべてひとりごとの「わたしもほしいな」（『でこちゃん』）、「にじのもよりのワンピース、とってもきれいだな」（『わたしのワンピース』）のような聞き手目当て性のない文である。聞き手目当ての意味では、女はネのほうを使用しているといえる。

その他、出現数は少ないが、使用に性差のある終助詞には、以下のようなものがある。（ ）内は文数。

- ・女にかたよった使用：カシラ（女21／男2）
- ・男のみ、あるいは、男にかたよった使用：モンカ（女0／男15）、ゼ（女0／男7）、サ（女7／男51）、トモ（女1／男18）、ヤ（女2／男14）

5. おわりに

絵本のことばは単純だが、ことばづかいの性差は明確に読みとることができる。たとえば、次の〔例1〕～〔例3〕ではひとつの作品で女と男のことばが対比的に描き分けられている。

〔例1〕『うんちしたのはだれよ！』

- ・女：「あたしだったら こうするわ」（ハト）／男：「はくだったら こうするさ」（ウマ）

〔例2〕『てぶくろ』

- ・女：「だれ、てぶくろに すんでいるのは？」(カエル)、「どなた、てぶくろに すんでいるのは？」(キツネ) / 男：「だれだい、てぶくろに すんでいるのは？」(ウサギ)、「だれだ、てぶくろに すんでいるのは？」(オオカミ)
- ・女：「おしゃれぎつねよ。わたしも いれて」(キツネ) / 男：「はいいろいろおおかみだ。おれも いれてくれ」(オオカミ)、「うおー うおー。のっそりぐまだ。わしも いれてくれ」(クマ)

〔例3〕『ぶたぶたくんのおかいもの』

- ・女：「あら そう、じゃあ いっしょに いってあげるわね」(からすのかあこちゃん) / 男：「とちゅうまで いっしょに いってあげるよ」(こぐまくん)

こうしたことばの性差はいずれも日本語概説書などでとりあげられる「ことばの男女差」どおりのものである。ただし、これは、佐竹(2010)で指摘したように、日本語の実態というより、「日本語には女／男それぞれの特性にふさわしい別々のことばづかいがある」とすることばのジェンダー規範—〈女ことば／男ことば〉規範—ととらえるべきものである。絵本はキャラクターのことばづかいを性によって描き分けることで、こどもたちに日本語の〈女ことば／男ことば〉規範を教えるメディアとなっているといえる。

自称代名詞の性差は、常に自己を女あるいは男のいずれかにカテゴリー化することを強いるという点で、ジェンダーを作り出す重要な役割を果たすものであるが、こどもたちは、自分をあらわすことばは、女はワタシ・アタシ、男はボク・オレと異なるのが当然だということを学ぶ。また、文末形式の性差が示すのは、表現意図を直接的なかたちで明示することば、聞き手に強く働きかけることばを使うのは男で、女は主張をやわらげたことばや丁寧なことばなど聞き手に配慮したことばを使うものだということである。こどもたちは、男は強いことばを使ってもよいが、女はやさしいことばを使うべきだ

ということを学ぶことになる。

絵本の世界では女（の子）と男（の子）の扱いも描かれかたも異なり、ジェンダーバイアスが大きいのであるが、女と男のことは異なるという〈女ことば／男ことば〉規範の提示もそれを補強するものとして働いているのである。

注

- (1) 「絵本ナビ」(<https://www.ehonnabi.net/>)での「編集部おすすめ」作品のリストアップは、2017年12月と2018年8月の2回おこなった。1回目と2回目では155作品が共通しており、1回目だけにあげられていたのが17作品、2回目だけにあげられていたのが24作品あった。今回データとした作品は、両方を合わせた196作品である。
- (2) <https://www.j-sla.or.jp/recommend/yoiehon-top.html>
- (3) 藤枝（1983：154）によれば、女の主人公は、調査した『改訂 日本の絵本100選』（1981偕成社）では男の3分の1、『改訂 世界の絵本100選』（1981偕成社）では4分の1、『絵本の本棚200冊』（1976すばる書房）では5分の1だとする。図書館の貸し出し件数の調査によって選んだ100作品を調査した坂西・大澤（1989：21-22）では、主人公は男58%、女21%、2000年度に刊行されていた絵本121作品を調査した藤田（2003：263）によれば、主人公は男69.7%、女21.2%である。また、西川（2017：37）によれば、『ミリオンぶっく』（2015トーハン）全108タイトルの主人公は男50%、女13%である。
- (4) 女／男はどんな文末形式を用いるものとして描かれているかを知るため、文末形式によって性別を判断することは避けた。したがって、「その他」には、たとえば、ゾ（16例）、ワ（3例）なども出現する。
- (5) 山口他編（2001：802）ではモン・モノは「甘えた態度で訴えたり不平不満を言ったりするときに使うことが多い」とする。なお、用言述語につくモンは女29例、男22例ある。

参考文献

- 坂西友秀・大澤広子（1989）「絵本に描写された「男らしさ・女らしさ」『埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）』38-2 pp. 15-38 埼玉大学教育学部
- 佐竹久仁子（2010）「〈女ことば〉と品格イデオロギー」『ことば』31 pp. 35-50 現代日本語研究会
- 西川晶子（2017）「絵本におけるジェンダー—絵本の主人公性別が子どもの心理発達に及ぼすジェンダー圧力—」『信州豊南短期大学紀要』pp. 31-55 信州豊南短期大学
- 藤枝滯子（1983）「絵本にみる女（の子）像・男（の子）像」武田京子・木村栄・田中喜美子編『講座主婦1 主婦はつくられる』汐文社 pp. 148-174
- 藤田由美子（2003）「子ども向けマス・メディアに描かれたジェンダー—テレビおよび絵本の分析—」『九州保健福祉大学研究紀要』4 pp. 259-268 九州保健福祉大学
- 山口秋穂・秋本守英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

調査絵本リスト

（紙幅の関係で題名のみ記す。*は4節の分析対象から除いた作品）

1950年代（2作品）：かにむかし*／きかんしゃやえもん

1960年代（39作品）あおくとときいろちゃん／いたずらきかんしゃちゅうちゅう／いやだいやだ／おおかみと七ひきのこやぎ／おおきなかぶ／かさじぞう*／かばくん／ぐりとぐら／ぐるんぱのようちえん／こぶとり*／三ねんねたろう*／3びきのくま／3びきのこぶた／3びきのやぎのがらがらどん／しずかなおはなし／じめんのうえとじめんのした*／11びきのねこ／しょうぼうじどうしゃじぶた／しろいうさぎとくろいうさぎ／すてきな三にんぐみ／そらいろのたね／だいくとおにろく*／だるまちゃんとてんぐちゃん／たろうのおでかけ／ちからたろう*／てぶくろ／どろんこハリー／ねこねこねこ／ねないこだれだ*／花さき山*／はなをくんくん／びかくんめをまわす／フレデリック／ももたろう*／ももの子たろう*／もりのなか／ラチとらいおん／わたしとあそんで／わたしのワンピース

70年代（40作品）：あーんあん／あいうえおうさま*／イエペはぼうしがだいすき／い

しころ*／おおきなおおきなおいも／おおきなきがほしい／おいしいのほうけん／おしゃべりなたまごやき／おばけのてんぶら／おばけのバーバパパ／かいじゅうたちいるところ／かえるのあまがさ*／かさ*／からすのパンやさん／ガンピーさんのふなあそび／木はいいなあ／きょうはなんのひ？／くまのコールテンくん／ジオジオのかんむり／じごくのそうべえ*／しっぽのはたらき／11びきのねことあほうどり／ぞうくんのさんぽ／ぞうのボタン—字のない絵本—*／そら！はだかんぼ／ダンプえんちょうやっつけた／ちびゴリラのちびちび／ティッチ*／とりかえっこ／どろんこぶた／なにをたべてきたの？／ねずみくんのチョッキ／ねずみのすもろ*／ノンタンぶらんこのせて／はけたよはけたよ／はじめてのおつかい／ピーターのくちぶえ／ぶたたぬききつねねこ*／まっくらネリノ／モチモチのき*

80年代 (37作品)：あな／雨、あめ*／いってきます！／おでかけのまえに／おばけのどろんどろんとびかびかおばけ／がたたんたん*／ガラスめだまときんのつものヤギ／キャベツくん／ぐうぐうぐう*／くまさん くまさん なにみてるの？／こんとあき／さっちゃんのまほうのて／14ひきのあさごはん／14ひきのおつきみ*／14ひきのびくにつく／スイミー 小さなかしこいさかなのはなし／でんぐりでんぐり*／どうぞのいす／とべバッタ／ねごさかな／ノンタン はみがきは—み—*／パパ、お月さまとって！／はらぺこあおむし／ふうせんクジラ／ぶたのたね／ぶたぶたくんのおかいもの／ほくとわたしのせいかつえほん*／ほちほちいこか*／ぼんぼん山の月／まどからおくりもの／みんなうんち*／めのまどあけろ*／6つのいろ*／やさしいライオン／りんごです／わっこおばちゃんの手とりあそび*／わにさんどきっ はいしゃさんどきっ

90年代 (43作品)：いいこってどんなこ？／うたのてらんかい*／うんちしたのはだれよ！／えんそくバス／おおきくなるっていうことは／おじさんのかさ／お月さまってどんなあじ？／おやすみゴリラくん／がたごとがたごと*／カブトくん／きょうはみんなでクマがりだ／きよだいなきよだいな／くろねこかあさん*／ケンケンとびのけんちゃん／ゴムあたまポンたろう／さつまのおいも*／ジローとほく／すっぽんぼんのすけ／そらまめくんのベッド／だじゃれどうぶつえん*／できるかな？あたまからつまさきまで／でこちゃん／でんしゃにのって／とけいのほん1／どんなにきみがすきだかあててごらん／にじいろのさかな／にゃーご／ね、ほく

のともだちになって！／バムとケロのおかいもの／はやくねてよ／ひとまねこざる
／ピン・ポン・バス／ふゆめがっしょうだん*／ぼくたちのコンニャク先生／ぼく
のくれよん*／ぼくのはなし／まあちゃんのながいかみ／めっきらもっきらどおん
どん／もけら もけら*／やさいのおなか*／よかったねネットくん*／よるくま／わ
んわん わんわん*

2000年代 (70作品)：あっちゃんあがつくたべものあいうえお*／あらまっ！／いいか
らいいから／いま、なんさい？／いろいろごはん*／うえきばちです*／うんぴ・
うんによ・うんち・うんご／オー・スッパ／おかあさんおかあさんおかあさん…／
おかあさんのパンツ／おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん
／おたすけこびと／おどります*／おにぎりくんがね*／おばけのもり／おへその
あな／おまえうまそうだな／おもちのきもち*／おやすみ ぼく／かいわれぎむらい
とだいこんひめ／かえてきたカエル／かえるをのんだととさん*／かちかちやま
／きつねとうさぎ／きつねのかみさま／きもち／くだものだもの*／くまくん／
くまのがっこう*／くれよんのくろくん／けんかのきもち／コッケモーター！／サ
ンドイッチ サンドイッチ*／したのどうぶつえん／十二支のおはなし／しゅくだい
／しりとりのだいすきなおうさま／すやすやタヌキがねていたら*／せんろはつづ
く／たまごにちゃん／だめよ、デイビッド！／ちょっとだけ／チリとチリリ／で
んしゃえほん*／でんしゃでいこう でんしゃでかえろう*／ドワーフじいさんのい
えづくり／なーらんだ*／ないしょのおともだち／ないた／ねえだっこして／ねえ
とうさん／ねずみさんのながいパン／バスなのね／ピッツァほうや／100かいだて
のいえ／ピヨピヨスーパーマーケット／ピンポン／ふってきました／ふねなのね
／ブラッキンダー／ベネロベひとりでふくをきる／まゆとおに—やまんばのむすめ
まゆのおはなし／もったいなばあさん／もっちゃうもっちゃうもうもっちゃう／
もっとおおきなたいほうを／やさいだいすき*／ゆうびんやさんおねがいね／リサ
とガスパールののであい／わゴムはどのくらいのびるかしら？*／わにわにのおふろ*

2010年代 (30作品)：アリのおでかけ*／いろいろばあ*／おとうさん もういっかい
かいたかい／おもいのたけ／おやすみなさい*／ごあいさつなあに／ごめんやさい
／シニガミさん／しろくまのパンツ／新幹線のたび／す〜べりだい*／ぞうちゃん
の いやいや／だいおういかのいかたろう／ともだち できたよ／どろんこ！どろん

こ！／なぞなぞのみせ*／なでなでももんちゃん*／はぶじゃぶじゃん／はみがき
れっしやしゅっぱつしんこう！／はるかぜさんぽ／パンツのはきかた／パン どう
ぞ*／ふうとはなとうし／ほくのトイレ／ぺんぎんたいそう*／ほげちゃん／まくら
のせんになそここのあなたの巻／まって／もりのおくのおちゃかいへ／わたしはあか
ねこ

(さたけ くにこ)

(2019.11.18 受理)